

戦争に思う

相模原市支部 秦 範子（子）

戦没者 秦 甚太郎

戦没地 フイリピン

遠くに目をやり、若い頃の懐かしい歌を口ずさむ母も今年で九十一歳を迎えます。

昔は時々「お母さんはね、お父さんが戦死と分った時はこれからどうやって二人の幼子を育てて行くのかを考えると涙も出なかったわ」と話していました。本当に困った時は涙も出ないものなのでしょう。出るうちは世の中や家族に甘えているのかもしれませんがね。その様な経験のない私にはその時の母の気持ちを今の年齢になっても理解するのが難しいです。そんな母もアルツハイマーになり、家では日々唱歌を歌い手拍子を叩き、体操をして楽しく過しています。一日でも多く幸せを感じて欲しいと思っています。

若い頃の父は支那事変、国境事変と二度の出征をして戻り母と結婚致しました。二人は仕事の関係で東京に所帯を持ち、結婚生活は四、五年でしたがその後三度目の出征をしました。私が二度二歳を過ぎた頃から戦争が一段と激しくなり母は私を連れて父の実家のある藤野へと疎開致しました。その後東京は大空襲になり私達親子は運良く逃れる事が出来ました。

そして昭和二十年五月戦死の公報を受け取り比島ルソンに於いて父三十二歳で終焉を迎える事になりました。

私は父の面影も抱かれた記憶も無く東京での出征前の二枚の写真だけが父との思い出です。二十年生れの妹は父と一緒に写った写真すらも無く本当にかわいそうに思います。

戦後の私は幼かったので余り記憶はありませんが、品物もお金も無い時代で配給の缶詰と家で作った野菜を食べ、母は幼子を育てる為に一生懸命に働き努力して参りました。その様な母親に感謝の念でいっぱいです。

戦争とは何と無慈悲な事なのでしょうか。若くして戦地に赴く人、残された妻、その子供達の人生を大きく変える恐ろしい出来事なのです。今でも地球上には戦争に苦しむ人が沢山います。何の罪も無い人が悲しみ苦しんで亡くなって行くのが戦争です。

曾^おば^いの　　おでこを撫^なでる　孫三つ　平和の日々よ　永^と久^わにと願^{ねが}う